Tulips University of Tsukuba Repository

フッサールの実存的現象学（1930年夏）

著者	堀 栄造
雑誌名	筑波哲学
巻	26
ページ	23-34
発行年	2018
URL	http://hdl.handle.net/2241/00151057

フッサールの実存的現象学（1930 年夏）

堀　栄造

序　言

エドムント・フッサール（1859～1938）は、1920 年代半ばから 1930 年代半ばへかけての最晩年の約 10 年間に「実存的現象学」を展開した[1]。本論は、フッサリアーナ（フッサール全集）第 42 巻所収のフッサールの草稿に基づいて、1930 年夏時点のフッサールの実存的現象学を解明しようとするものである。

（一）実存的生の様式

フッサールは、フッサリアーナ（フッサール全集）第 42 巻所収の 1930 年夏学期の草稿「人間的現存在の全体およびそのうちに存する目的論に対する超越論的考察。真正な人間という理性的理念の展開としての自律性の展開。[2]」において、人間存在としての現存在について、次のように述べている。「前以て気遣う生、将来に対して絶えざる気遣いのうちにある現存在［Dasein］は、或る客観あるいは同じような諸客観の繰り返す経験とともに、実践的要求を満たす者として生じ、将来の繰り返しの際に適合する者として生じ、手段（食物、防衛手段、攻撃手段、等々）としての統覚へ至り、そして、さらに、意志規定の構成へ至る。つまり、こうした客観を、あるいは、或るそのような客観を、特殊な意図を以てであれそうではないのであれ、合目的的なものとして、役立つものとして、良いものとして存続させながら、気づき、準備し、もつことへ、〈そのことへ〉向かう中に、将来への前以ての気遣いの統一が存する[3]」。ここで、フッサールは、人間存在としての現存在を、将来に対して絶えず気遣いながら実践的要求を満たす者として捉え、実践的要求の目的たる自己保存とそれを確保するための手段の統覚および実践的要求の実現のための目的論的意志規定の構成について説いている。

このように、自己保存を絶えず気遣いながら生きる現存在としての生は、「実存［Existenz］」以外の何ものでもない。つまり、フッサールは、ここで、生身の人間存

在としての現存在についての本質洞察たる「実存的現象学」を遂行しているのである。

実存的生の本質洞察を遂行するフッサールは、引き続き次のように述べている。「一般的に将来に対して前以て気遣う生の形成は、或る対象的な将来の地平をもつだけでなく、或るできるだけ満足する生の将来を現在において気遣うような生の形成である。今やそれを必要とする時機つまり満たされ〈ねばならない〉ような要求の時機、時点がやって来る場合、自我が、それに関して自己の〈獲得物〉つまり所有物として自由に使いうるような財を常に作り出す（そして手に入れるあるいはそれを獲得しようと努める）という形で、自我は、或るできるだけ満足する生の将来に対して気遣う。満足は、現下の〈自己保存［Selbsterhaltung］〉の志向性である。不満足は、自己保存の妨害である。〈存続する〉要求をもつ或る自我としての自我つまりその自我の生の様式［Lebensstil］は、要求志向から要求充足へ至る生の様式であり、しかも、常に繰り返し同じような要求志向が生じて満足へ突き進むというようにであり、その結果、要求の様式および類型は、根源的要求から出発して再び存続する要求であるような高次の基礎づけられた要求へ高まりながら、或る存続する特殊な要求様式を基礎づけながら、残存する[4]」。ここで、フッサールは、将来に対して前以て気遣う実存的生の形成は、或るできるだけ満足する生の将来を気遣う実存的生の形成である、と説いている。将来の自己保存を気遣う実存的生は、将来の自己満足を気遣う実存的生なのである。そして、満足は、現下の自己保存の志向性であり、不満足は、自己保存の妨害なのである。そうすると、自己保存を要求する実存的生の様式は、要求志向から要求充足へ至る生の様式である、ということになる。さらに、実存的生の要求の様式および類型は、根源的要求から出発して再び存続する要求であるような高次の基礎づけられた要求へ高まりながら、或る存続する特殊な要求様式を基礎づけながら、残存する、と説かれている。そうだとすれば、実存的生の要求の様式および類型は、根源的要求の様式および類型から高次の要求の様式および類型へ高まることになる。それは、どういうことなのか。それは、食物や防衛手段や攻撃手段等々に関する動物的な低次の根源的要求から倫理的価値や宗教的価値等々に関する人間固有の高次の要求へ高まるということを意味する。

そこで、フッサールは、実存的生の要求の様式が低次の要求から高次の要求への進歩という本性をもつことを、次のように述べている。「不可避の妨害や障害や失望は、満足する人間的現存在のうちへ取り込まれ、妨害の最終的な克服の下での満足の連鎖の様式として、根源的要求の満足の連続だけでなく高次の基礎づけられた要求の向上

および満足でもあるような或る進歩は、向上における生の進行［ein Lebensfortgang im Aufstieg］である。まとめれば、次のようになる。つまり、望ましい生の統一様式［der Einheitsstil eines wünschenswerten Lebens］をもつような全体生［Gesamtleben］の理想であり、そして、そのうちで、自我が、自己の保障される〈現存在〉の常習的確信において、自己の生の環境世界に関する自己の支配の常習的確信において、言い換えれば、自己の力（そして社会的には他者の助力の下で）に基づいて環境世界を善なる世界［Güterwelt］へ向けて形成しうるという確信において、あるいは、自由裁量で或る〈喜ばしい〉生を可能にするような善なる世界を環境世界に付与しうるという確信において生きる全体生の理想である[5]」。ここで、フッサールは、「望ましい生の統一様式」をもつ「全体生」は、人生行路における不可避の妨害や障害や失望を克服しながら、要求の向上および満足を伴う「進歩」を遂げ、「向上における生の進行」を遂げることを理想としている、ということを、説いている。そして、フッサールは、「全体生」は、環境世界を善なる世界へ向けて形成しうるという確信において生きることを理想としている、ということを、説いている。つまり、フッサールの実存的現象学は、実存的生の様式が善なる世界の形成へ向けて生きることを理想としていることを、析出しているのである。

（二）真正な現存在

前節で見たように、実存的生の様式が善なる世界の形成へ向けて生きることを理想としているのだとすれば、そうした理想の生き方をめざす個人および人間の「真正な現存在」とは、どのようなものだろうか。

フッサールは、間主観性としての共同体に関して、次のように述べている。「今や、一切は、間主観性のうちへ包含され、そして、それによって初めて具体化される。際立たされた形式における人間‐自我としての自我の統一は、将来に対する気遣いの中でそして生の将来を幸運にも満足する現存在という意味で常に形成しうるという希望や意図の中で或る生への意志における人間的現存在の統一である。共同体連関のうちに存するものは、或る生への意志における人間的現存在の可能な特殊形態、そのように意欲する者やそのような生の理想によって導かれる者の共同体、こうした諸個人的意志の共同体化、その共同体化における諸個人的主観の争いへの配慮、等々である。自己保存の諸関心の合意、調停は、そのうちではあらゆる構成員が〈できるだけ良く〉

遇されるような自己自身を保持する全員一致の共同体の理念である[6]」。ここで、フッサールは、人間 - 自我としての自我の統一は、将来に対する気遣いの中でそして生の将来を幸運にも満足する現存在という意味で常に形成しうるという希望や意図の中で或る生への意志における人間的現存在の統一である、と説いている。したがって、フッサールの実存的現象学によれば、「真正な現存在」としての実存的生は、将来への希望や意図を以て或る生を意志する人間的現存在なのである。そして、自己保存の諸関心の合意、調停が、共同体の理念であり、それは、「〈真正な［echt］〉共同体的現存在という形式における個人および人間の〈真正な現存在〉という最上の理想[7]」をめざす。

それでは、実存的生は、「真正な現存在」へどのようにして至るのか。それに関して、フッサールは、次のように述べている。「実践的な〈越えて［Hinaus］〉の構成つまり〈無限なもの〉として有限な現存在を越えて行く或る存在する実践的世界の構成によって死を越えて行く真正な意志の超越。現存在は、私の意志に依拠するし、我々の意志に依拠する。受動的な衝動および駆り立てられることにおける現存在は、非合理的に継続し、盲目的に継続し、幸および不幸において継続し、現存在は、さしあたり子供の衝動性において、それから衝動的に生じる社会的道徳性および宗教の支えの敬虔な構成においてできるだけ存続するという仕方で継続するのであり、非合理的有限性の対蹠者つまり完全な神を伴って継続するのであり、完全な神は、無限な完全性としての無限性のマントを一切の有限性を越えて広げ、一切のものを究極的に善へ向け、不死性を保証し、永遠の生において敬虔なものの至福［Glückseligkeit］を保証する。人間が、将来の浄福［Seligkeit］を保証する神を宗教的に〈合理化する［rationalisieren］〉ことによって、人間は、今や、〈非合理的〉生を引き受けるのである。それから、思惟し判断し認識する理性としての新たな自律的ラチオ［ratio］の組み入れと新たな意味での合理的な自己責任性。遂には、それに基づいて生じる理論つまり特殊な理論的諸問題としての一切の諸世界問題を包摂しそして解決しようとする理論[8]」。ここで、フッサールは、無限な実践的世界の構成によって現存在を有限たらしめる死を越えて行く「真正な意志の超越」を、説いている。実存的生としての現存在は、当初は、受動的な衝動的な現存在として、非合理的有限性の中を社会的道徳性および宗教に支えられながら生き抜くのであり、無限な完全性を伴う完全な神によって不死性および永遠の生における敬虔なものの至福を保証されながら生き抜くのであるが、遂には、将来の浄福を保証する神を宗教的に「合理化する」ことによっ

て、「非合理的有限性の生」を克服して「合理的無限性の生」へ至るのであり、自律的なラチオの組み入れと合理的な自己責任性によって、「真正な現存在」へ至るのである。つまり、実存的生としての現存在は、合理的自律性によって「非合理的有限性の生」を克服して「合理的無限性の生」としての「真正な現存在」へ至るのである。

（三）理性的人間性の自己構成の諸段階

「真正な現存在」とは、フッサールにとって、合理的自律性を生きる「理性的人間性」である。フッサールは、理性的人間性の自己構成の諸段階に関して、「①最低次の段階」・「②高次の段階」・「③合理化の最高段階」の三段階に分けて次のように述べている。〔①～③の丸数字は、便宜上、筆者が付したものである。以下同様。〕「①最低次の段階：自己保存の衝動、他者へ向かう衝動、共同体化へ向かう衝動。愛の衝動、普遍的隣人愛へ向かう他者愛の拡張、利己的自己保存の共同体から出発してさえも、愛の共同体の基礎づけへ向かう衝動。②高次の段階：理性、ラチオと合理的生、学問による世界の合理化、そして、世界や他者や自己自身に関する人間の理性的支配の機能としての学問。③合理化の最高段階、理性的人間としての自律的人間の最高段階。人間的理論的自律の最高段階つまり超越論的現象学および現象学的学問。人間的実践的自律の最高段階つまり絶対的理性の段階あるいは絶対的理性の理念の下での生の段階、言い換えれば、現象学的に基礎づけられた生。普遍的な理性的生の理念[9]」。ここで、フッサールは、理性的人間性の自己構成の諸段階の「①最低次の段階」は、自己保存・他者との関係・共同体化・愛に関する「衝動的生の段階」である、と説いている。つまり、実存的生の低次の段階は、「本能的衝動的生の段階」だということである。そして、フッサールは、理性的人間性の自己構成の諸段階の「②高次の段階」は、世界・他者・自己自身に関する「人間の理性的支配の段階」である、と説いている。つまり、実存的生の高次の段階は、「理性的生の段階」だということである。さらに、フッサールは、理性的人間性の自己構成の諸段階の「③合理化の最高段階」は、「理性的人間としての自律的人間の最高段階」である、と説いている。つまり、実存的生の最高段階は、「現象学的に基礎づけられた生の段階」だということになる。したがって、「真正な現存在」としての「理性的人間性」は、理性的合理化を通じて段階的に自己構成を遂げて行くのであり、究極的には、現象学的に基礎づけられることになるのである。

それでは、「真正な現存在」として「理性的人間性」が現象学的に基礎づけられるとは、どういうことなのだろうか。それに関して、フッサールは、次のように述べている。「現象学は、生き生きと継続的に打ち立てられる間主観性の自己構成の諸段階と、間主観性において構成される世界の諸段階を明らかにしたし、超越論的主観性の歴史性と超越論的主観性にとって存在する世界の歴史性を明らかにしたし、そのうちで人間的生が世界内的実践において苦難に満ちたものとなるような動機づけを明らかにした。人間的生が世界内的実践において苦難に満ちたものとなるのは、個々の苦難によってではなく、普遍的な人間的目標化と世界の非合理的な変則性との矛盾によってであり、世界は、予期せぬ出来事を伴い、自然に基づく運命的な事や共同体的生における運命的な事を伴うし、〈偶然的に〉生じる死を伴う。現象学は、理性や学問による人間の自律性へ至り、そして、こうした抗争における最初の理性は、世界の運命の構造や消滅の構造を伴っているので、こうした自律性の崩壊へ至るような動機づけの展開を解明した。しかし、現象学は、自律性を求める哲学的 - 学問的獲得努力が第二次的盲目的衝動性および（むしろ自己喪失性であり他者の自己喪失性であるような）世界への喪失性へ沈み込んで行くように、自律性を求める哲学的 - 学問的獲得努力が方法的 - 技術的営為においてそれへと陥るような変様をも指示する。現象学は、真正な隣人愛において、世界客観としての他者つまり実在者としての他者が主題であるさまをではなく、相対する自我（仲間）が主題であるさまを指摘するのであり、愛において超越論的人格的一体化つまり存続する一体化が起こるさまを指摘するのであり、その一体化が同時に世界内化されてどれほど現出するのかを指摘するのである。他方で、隣人愛の営為において、善行の営為において、或る世界内的行動は、確かに、他者に愛を示すという根源的目標を伴って広がるが、こうした世界内的行動は、或る空虚なシンボルつまり或る慣習化された目標にされるのであり、そうした目標は、生き生きとした愛や他者との生き生きとした交際および一体化をもはや何ら含まずに成就され、実際の相対する愛をも含まない。現象学は、根源的な真正な愛の一体化としての隣人愛が、真の自己愛においてつまり自己自身へ愛しつつ関係づけられていることにおいて、或る対を成すものをももつさまを示すのであり、愛すべき者として自己の生の形態をももつさまを示すのである（私自身との〈一致〉において生きるのだ！）。現象学は、他者と一体化して絡み合っているさまを示すのであり、真正な愛と低次の愛が区別されるさまを示すのである。真正な自己愛[10]」。ここで、フッサールは、現象学が、生き生きと継続的に打ち立てられる間主観性の自己構成の諸段階・

間主観性において構成される世界の諸段階・超越論的主観性の歴史性・超越論的主観性にとって存在する世界の歴史性・そのうちで人間的生が世界内的実践において苦難に満ちたものとなるような動機づけを明らかにした、と説いている。そして、フッサールは、人間的生が世界内的実践において苦難に満ちたものとなるのは、普遍的な人間的目標化と世界の非合理的な変則性との矛盾によるものである、と説いている。したがって、現象学は、実存的生がさまざまな苦難に見舞われるにもかかわらず「理性や学問による人間の自律性」によって苦難を克服して行くさまを指示する「実存的現象学」なのである。そして、現象学は、真正な隣人愛において、世界客観としての他者つまり実在者としての他者が主題であるさまをではなく、相対する自我（仲間）が主題であるさまを指摘し、愛において超越論的人格的一体化つまり存続する一体化が起こるさまを指摘する「実存的現象学」なのである。つまり、この時期のフッサール現象学は、認識主観としての自己が認識客観としての相手を見るさまを析出するかつての前期・中期の「認識論的現象学」ではなく、親身になって相手のうちに自分を見出して相手と一体化する愛としての真正な隣人愛および真正な自己愛を析出する「実存的現象学」なのである。

（四）理性的人間性の展開と理性的教育

理性的合理化を通じて段階的に自己構成を遂げ、現象学によって基礎づけられる理性的人間性は、どのように展開されるのであろうか。それに関して、フッサールは、次のように述べている。「特有の人間存在が、本質必然的であるとすれば、自律性の形式での超越論的主観的存在が、間主観性の可能性に属する。その最低次の段階においては、あらゆる人間は、それ自体で自律的である。あらゆる人間は、現在を越えて行き、そして、現在の外部へ及ぶ実践的環境世界およびそれと相関的な人間の自己構成つまり時間的生や自己批判を伴う人格性の統一としての人間の自己構成を創造するような仕方で、自由に選択しそして決定する。人間としての人間の展開は、まさに自律において遂行され、自律の展開としてつまり理性の展開として遂行される。その際に、決定的段階は、今や学問的に導かれる実践的理性一般の機関としての学問的理性の展開である。しかし、形相的には、全体として自己充足する志向性としての展開の向上の問題や、一切の諸段階において繰り返される没落の問題があり、相関するものとしての理性と非理性といった問題があり、向上の手段としての高次の理性による

非理性の克服といった問題がある。受動性は、常にそこにあり、常に能動性の基礎であり、自由の基礎である。しかし、一方で、没落として、自由な力の緊張の弛緩として、屈服として、不自由のうちに単なる諸衝動を含むような受動性における没落があり、他方で、理性の技術化の必然的過程として、第二次的受動性への能動性の内的転換の必然的過程として、不自由のうちに単なる諸衝動を含むような受動性における没落がある。それゆえ、自己考察および自己批判の絶えざる必然性の解明があり、そして、最終的に、自己において一切の他者に責任を負い、そして、自己において普遍的自己責任の諸々の道と普遍的自己責任の存在や普遍的自己責任の世界に対する共同体の責任を守り抜くものとしてのあらゆる超越論的主観の普遍的自己批判の解明がある。しかし、こうした必然性は、自由の展開における展開の必然性であり、そして、それ自体、その際に進歩する人間的理性による生の進歩する規格化において、万人の自己責任の自由における人間の展開としてのさらなる間主観的展開への道を示す[11]」。ここで、フッサールは、理性的人間性が時間的生や人格的生として自律的に展開されることを説いている。理性的人間性の展開は、自己充足する志向性としての展開であり、その展開の過程で理性が非理性を克服すれば実存的生は自律的になって向上し、理性が非理性を克服しなければ実存的生は自律性を失って没落する。実存的生は、不自由な受動性の衝動の次元を脱して自由な能動性の理性の次元へ至れば自律的になって向上し、逆行すれば自律性を失って没落する。不完全な実存的生は、絶えず自己考察および自己批判を遂行しながら向上しなければならず、進歩する人間的理性による生の進歩する規格化においてさらに間主観的に展開されなければならない。

進歩する人間的理性による生の進歩する規格化は、理性的教育によるものである。それに関して、フッサールは、次のように述べている。「人間性の展開は、あらゆる生成的個別的自我において繰り返され、歴史的現在における人間としての人間への教育としての個人的展開において繰り返される。自由の規範に基づいて統制される理性的教育は、その場合、展開の地所となり、そして、それ自体、展開において歴史的であり、それ自体、完全性のさまざまな段階においてそこにあり、相対的に完全な理性的なものへ至るまでの意図的な自由に考量する教育へ向かう歴史的に生成された人間的周囲世界および文化的周囲世界への受動的自己適応の一切の諸段階においてそこにある。そこには、共同体化されたものとしての教育があり、青少年を教育しようとし、教育責任を帰せられる主観性としての共同体があり、学校等々がある[12]」。ここで、フッサールは、人間性の展開は、あらゆる生成的個別的自我において繰り返さ

れ、歴史的現在における人間としての人間への教育として個人的展開において繰り返される、ということを説いている。そして、フッサールは、自由の規範に基づいて統制される理性的教育が人間性の展開の地所となることを説いている。したがって、理性的人間性の展開は、理性的人間を自律的なものの段階へ引き上げる理性的教育によって遂行されるのである。

（五）普遍的目的論

人間性の展開を自律の展開にする理性の展開に対して、フッサールは、どのように考えていたのだろうか。それに関して、フッサールは、次のように述べている。「最終的に、現象学的理性が開示しその真正な意味から見て規定する普遍的目的論は、有限な到達可能なものとしてあるのではなく、絶対的完全性をもつ無限な理念との関係のうちにある。一切の到達可能なものは、有限であり、暫定的なものとしての一切の存在は、有限性のうちにあり、そして、やはり、絶対的完全性をもつ理念の下では、無限性へ向かう途上にあるにすぎない。絶対的完全性をもつ理念は、常に展開を導く理念であるが、無限に含意された諸地平における展開は、既に志向されまだ実現されていないものを度外視して、既にその限定において完全なものを常に相対化する。把握し判断し最終的に現象学的理性の段階へ引き上げられる人間は、自己のうちで明確化された構成を遂行する。理性的人間として、彼は、自己のうちに定められそして低次の段階で既に展開された理性的性向を発揮する。自由における存在への性向を、彼は、完全な自由への意志において発揮し、その際に、予見されてはいるがまだ明らかにされていないものとしての彼にとっての目標は、既に意識されておりそして導いている。人間は、自由を実現しうるために、既に自由のうちにいなければならない。彼は、目標の先行的確信の段階で、既に自由のうちにいなければならない。そして、現下の自由な活動において、彼は、考察や進展する熟考や志向的展開や方法を遂行するのであり、そして、遂には、方法としての学問を遂行するのであり、方法としての学問は、それ自体或る自由な理性的形成体および或る構成要素であるが、同時に或る奉仕するものつまり理性に奉仕するものであり、理性は、一般的に実現しうるのであり、それ自体過程における或る存在であり、進展する構成の過程で自由に基づいて機能する。展開された理性は、さしあたり、哲学的理性は、普遍的存在を明らかにしながら開示し、普遍的理性に基づく存在であるような最高の意味をもつ真の存在へ至るまで

普遍的存在をその構成において開示する[13]」。ここで、フッサールは、現象学的理性が開示し規定する普遍的目的論は、絶対的完全性をもつ無限の理念を目標として措定する、と説いている。つまり、理性的人間性の展開は、絶対的完全性をもつ理念としての普遍的目標に導かれて遂行されるのであり、普遍的目標をめざす有限な過程は、絶対的完全性をもつ理念によって相対化されるのである。したがって、現象学的理性の段階へ引き上げられた理性的人間は、自己のうちで明確化された構成を遂行し、普遍的目標をめざす有限な過程において目標の先行的確信の下に自律的に理性的性向を発揮するのである。それゆえ、フッサールは、理性は、進展する構成の過程で自律的に機能し、展開された理性は、普遍的存在を明らかにしながら開示し、究極的には普遍的目標としての普遍的存在をその構成において開示する、という普遍的目的論の立場を取るのである。

普遍的目的論に関して、フッサールは、さらに次のように述べている。「理性は、全時間性における一切の相対的存在に存在意味を与えるような或る理念であるのか、存在全体においていかなるものをも可能にする一切のものであるのか、しかも、（比喩的に言えば）内在的力としてあるいはそれに一切の存在が依存するような力としてそうであるのか？この場合、神の理念と世界目的論は、可能な存在全体の原理として問題とならなければならないし、この目的論がどの範囲まで及ぶのかということや、この目的論が偶然や非合理性や死やあらゆる形式の運命の〈支配〉の中ででさえ自由そのものから動機づけられた〈神の恩寵〉として存在に対する愛と自由な意志に由来するさまの解明と一体にして問題とならなければならない。そして、その際に、とりわけ、私は、さしあたり、一切の世界を統一しそしてやはり一切の世界がそれへ帰属するような一般的支配を度外視して、運命に見舞われた私へ人格的メッセージを送るような支配を考える。そして、ここには、信仰の問題があり、低次の段階の信仰の問題と、低次の段階の信仰そのものを開示しながら見定める理性的段階の信仰の問題がある[14]」。ここで、フッサールは、神の理念と世界目的論の理念を可能な存在全体の原理として問題としなければならないと説いている。そして、フッサールは、普遍的目的論は、偶然や非合理性や死やあらゆる形式の運命の「支配」の中ででさえ、自由そのものから動機づけられた「神の恩寵」として存在に対する愛と自由な意志に由来する、と説いている。つまり、神の理念と世界目的論の理念は、実存的生が非合理的な試練に耐えて有限な生の過程を理性的に自律的に生き抜きながら永遠の相の無限な生へ超越して行くうえでの理論的要請であり、そして、普遍的目的論は、「非合理

性の支配」の中ででさえ理性的自律性に動機づけられた「存在に対する愛と自律的意志」によって貫かれるのである。そこには、「非合理性の支配」を度外視して「運命に見舞われた者へ人格的メッセージを送るような支配」としての「実存的生を勇気づけ励まし支えるような理性的自律的支配」が、フッサールによって考えられている。それは、「信仰の問題」である。フッサールは、低次の段階の信仰の問題と、低次の段階の信仰そのものを開示しながら見定める理性的段階の信仰の問題がある、と説いているが、低次の段階の信仰とは、理性的自律的段階へ至る以前の非理性的信仰であり、低次の段階の信仰そのものを開示しながら見定める理性的段階の信仰とは、理性的自律的段階へ至った後の理性的自律的信仰であろう。したがって、理性的自律性に基礎づけられたフッサールの普遍的目的論は、理神論的立場から構築された実存的現象学であり、「実存的現象学的形而上学」であると言える。

結　語

本論は、第一に、1930 年夏時点のフッサールの実存的現象学は、自己保存を気遣いながら生きる現存在としての実存的生の様式が善なる世界の形成へ向けて生きることを理想としていることを析出している、ということを明らかにした（第一節）。第二に、1930 年夏時点で、フッサールの実存的現象学において、実存的生としての現存在は、合理的自律性によって「非合理的有限性の生」を克服して「合理的無限性の生」としての「真正な現存在」へ至る、ということを明らかにした（第二節）。第三に、1930 年夏時点で、「真正な現存在」としての「理性的人間性」は、理性的合理化を通じて段階的に自己構成を遂げて行き、究極的には現象学的に基礎づけられることになるのであり、その際のフッサール現象学は、認識主観としての自己が認識客観としての相手を見るさまを析出するかつての前期・中期の「認識論的現象学」ではなく、親身になって相手のうちに自分を見出して相手と一体化する愛としての真正な隣人愛および真正な自己愛を析出する「実存的現象学」である、ということを明らかにした（第三節）。第四に、1930 年夏時点で、フッサールの実存的現象学において、理性的人間性の展開は、理性的人間を自律的なものの段階へ引き上げる理性的教育によって遂行される、ということを明らかにした（第四節）。第五に、1930 年夏時点で、理性的自律性に基礎づけられたフッサールの普遍的目的論は、理神論的立場から構築された実存的現象学であり、「実存的現象学的形而上学」であると言える、ということを明ら

かにした（第五節）。

注

[1] 拙著『フッサールの後期還元思想―『危機書』への集束―』（晃洋書房，2017 年）の第 9 章および第 11 章を参照。
[2] Husserl, E., *Grenzprobleme der Phänomenologie*: Texte aus dem Nachlass (1908-1937), hrsg. v. Sowa, R. und Vongehr, T., *Husserliana*, Bd. XLII, 2014, S. 425.
[3] Ibid., S. 426.
[4] Ibid., S. 426.
[5] Ibid., S. 427.
[6] Ibid., S. 428.
[7] Ibid., S. 428.
[8] Ibid., S. 429f..
[9] Ibid., S. 432.
[10] Ibid., S. 432ff..
[11] Ibid., S. 441f..
[12] Ibid., S. 442.
[13] Ibid., S. 443f..
[14] Ibid., S. 447.

（ほり・えいぞう　大分工業高等専門学校一般科文系教授）